

〔研究ノート〕

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と 保育実践の意味づけ

—“動物園ごっこ”における事例検討を通して—

東 城 大 輔
Daisuke Tojo

大阪総合保育大学

本研究は「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として新たに10項目で整理され示された幼稚園教育要領改訂を踏まえて、現場での保育実践（本稿では異年齢での交流活動を含む動物園ごっこの実践事例を対象）と照らし合わせ、その意味を問うことを行った。方法として、現場の保育者が記す週案と日誌から考察することを試み、その結果、活動に視点をおいて整理することは園における保育を見直す指標となることとそのモデルが示されたこと、またそのモデルにより幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を捉える視点は活動によって濃淡があるということを確認する考え方が重要であるということが明らかになった。

キーワード：幼稚園教育要領、動物園ごっこ、週案、日誌、保育の見直し

I はじめに

1、幼稚園教育要領の改訂

2017年の3月に幼稚園教育要領が文部科学省より告示された。この教育要領は2017年度に周知され2018年度には完全実施となる。今回の改訂は、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂と保育所保育指針の改訂と同時に進められ、同様に周知期間を経て実施となる運びである。実施時期はずれるが、小学校・中学校における学習指導要領の改訂と同様に進められ、学校教育全体が大きく捉え直されようとしており、とりわけ幼児教育を出発とした学校教育の在り方が強調された転換期でもあるといえる。この幼稚園教育要領の改訂の背景について文部科学省によると「知識・情報・技術をめぐる変化の早さが加速度的となり、情報化やグローバル化といった社会的変化が、人間の予測を超えて進展するようになってきている」¹⁾ ことを問題の背景に挙げ、人間が人間らしくあることを、人工知能などロボットと比較し、感性を豊かに働かせることや、目的を自ら考え出すことができるという点が人間の強みである、と言及している。その人間が人間らしくあるために必要なのが学習であり、時代の変化に受身ではなく主体的に向き合っていく力をつけた子どもたちが未来の創り手となる、という思いが込められているのが今回の改訂である。このことは幼稚園教育要領の前文に「…よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有し、それぞれの幼稚園において、幼児期にふさわしい生活をどの

ように展開し、どのような資質・能力を育むようにするのかを教育課程において明確にしながら、社会との連携及び協働によりその実現を図っていく」²⁾ 重要性として新たに示された。その他、改訂にあたりいろいろな課題が議論され新たな項目として示された。暗記依存の知識に偏向するのではなく、アクティブ・ラーニングによってもたらされる主体的・対話的で深い学びが打ち出されていることや、カリキュラム・マネジメントにおける幼児期の終わりまでに育ってほしい姿が、具体的な10の姿として明示されたことなどである。

2、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）

ここでは、幼稚園教育要領の改訂で新たに記述された幼稚園教育において育みたい資質・能力をより具体化した幼児期の終わりまでに育ってほしい姿に注目する（本研究においては、この幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を「10の姿」として論じていくものとする）。この10の姿に至るまでの議論や経緯は文部科学省幼児教育部会の取りまとめ³⁾ に示され、また無藤⁴⁾ がそれぞれの姿についての解釈を述べるなど行っている。さらにこれについてはおそらく2017年度中に発行される解説書に詳しく述べられるであろう。

まず挙げられているのが「健康な心と体」である。この項目は領域「健康」の内容を要約していると解釈される。子ども自身がやりたいことに向けて心身を働かせることは、子どもの育ちに大きく影響するといえる。

二つ目に「自立心」が挙げられている。これは領域「人

間関係」に属する内容と解釈でき、幼児教育の中核的な部分でもあるといえる。諦めない気持ち、満足感、達成感を味わいながら生活し、そして自信をつけていく過程は、幼児期に大切だといわれる非認知能力に関わる力ともいえる。

三つ目に「協同性」が挙げられている。子ども同士の関わりを通して、一緒に何かに取り組む願望は、やはり人との関わりを通して芽生えていくものである。他の幼児と関わりながら試行錯誤する過程も領域「人間関係」に強く関連している。

四つ目に「道徳性・規範意識の芽生え」が挙げられている。これも領域「人間関係」にまとめられており、幼児が他の幼児との関わりの中で他人の存在に気付くこと、相手を尊重する気持ちをもって行動できるようになることなどは、信頼感の芽生えや思いやりに通じるといえる。もちろん、そこにはつまずきや折り合いをつけないといけないことなどに出会い、葛藤することも含まれており、そうした実体験が他の人に対してしてよいことといけないことの区別として身につけていく力なのだとはいえる。自分の気持ちを調整する力へとつながっているのである。

五つ目には「社会生活との関わり」が挙げられている。幼稚園教育要領には「家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる」と示されている。子ども自身が生活に関係の深いいろいろな人と触れ合う機会を増やすことで、自分の感情や意志を表現しながら共に楽しみ、共感し合う体験が期待される。生活に関係の深い施設などに興味・関心を抱くことも必要といえる。

六つ目は「思考力の芽生え」が挙げられている。出発点は子ども自身が抱く好奇心であり、そこから子ども自身が疑問をもったり、なぜそうなのか考えたり、幼児なりに考える力を伸ばしていく過程が幼児教育といえる。遊びを通して環境と関わっていくことこそその力といえる。

七つ目は「自然との関わり・生命尊重」が挙げられている。子どもたちの身の回りには様々な自然が存在する。その神秘性や不思議さに触れること、それを活かすこと、なぜそうなのか考えることなど、多くの意味をもっている。また、生命を大切にすることを育むことも身近な事象から学ぶことといえる。

八つ目は「数量・図形、文字等への関心・感覚」が挙げられている。数字や記号などは、日常の環境の中にあふれている。絵本を読めばそこには文字があり、またものを数えたり、大きさに分けたりすることも生活の中に

多く存在している。そうしたことへの感覚を興味として養うこと、そしてその感覚を、あそびを通して育てていくことが大切である。

九つ目に「言葉による伝え合い」が挙げられている。この項目は領域「言葉」に直結している。言葉を交わすこと、子どもが言葉を使って思いを伝えること、子ども同士がイメージを共有しあい対話すること、こういった経験を通じ、言葉を交わす喜びへとつないでいくことが必要である。

十番目には「豊かな感性と表現」が挙げられている。自然などの身近な環境と十分に関わる中で美しいものや心を動かす出来事などに出会い、感動するところから育っていく。音楽や造形表現など、いろいろな子どもたちの自己表現を保育者が受容し、その表現しようとする意欲を支えていくことが必要である。

こうして挙げられている10の姿は、実は決して新しい発想ではない⁵⁾ということも念頭においておく必要がある。改まってこの10の姿を達成目標にすることが求められているのではない。あくまでも、幼児期の調和の取れた発達を目指していこうということが前提にある。

3、保育実践との関係性

では、その方向性ともいえる姿が示されたことと、実際の保育実践とどう結びつけていくのか。これが今後、幼児教育の実践現場に求められているのである。幼児期の調和の取れた発達を目指す方向性が示されていることを、具体的に言う場、それは実践現場に他ならない。環境を通じた保育が展開されるのが実践現場である以上、10の姿をイメージしながら保育を行うことが、実践現場に求められていることになる。そこで浮かび上がる問題は、ではどのように実践していけば良いのか、という方法を考える必要性である。先にも述べたように、10の姿は決して新しい発想ではないということを踏まえて、では実践現場においての10の姿を捉える視点とは何なのか。これが重要な問題であるといえよう。新しい発想ではないとは言え、新たな項目として視点が示されたことには違いない訳であり、その姿を意識した活動を考えることは必至であろう。つまり、実践における具体的活動を挙げ検討することで、10の姿と実践との関係性が見えてくるのではないかと考えるのである。その考えに基づき、保育実践での具体的活動を取り上げるが、その中でも5歳児後半の育ちが見られる活動であることは押さえておきたい条件である。また、10の姿を多角的に捉えるためには、その日で完結する短期活動ではなく、中長期的活動である方が望ましいと考える。こうした条件を踏まえて本研究では、幼稚園の5歳児を中心として展開さ

れる“動物園ごっこ”の活動を取り上げ考察していくものとする。この“動物園ごっこ”の取り組みを、視点を変えながら考察し、その意味を問うことで10の姿との関係性について考察を深めていく。なお、この動物園ごっこの活動の詳細については後述する。

II 目的と方法

1、目的

幼稚園教育要領に示される事項を特に幼児期の終わりまでに育ってほしい姿に着目し、その姿がどのように実践とのつながりがあるのか、具体的な実践例から捉え、照らし合わせる試みである。ここでは、その照らし合わせて整理したモデルを示すこと、そしてそのモデルにより幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を捉える視点は実践においてどのような意味をもつのかを明らかにすることを目的とする。

2、方法

目的で掲げた、幼稚園教育要領に示される幼児期の終わりまでに育ってほしい姿と照らし合わせて検討するために、あくまでも幼稚園での具体的実践事例を軸に取り上げ考察する必要がある。“動物園ごっこ”の取り組みに焦点を当てる妥当性としては、2点挙げられる。まずは5歳児を中心とした活動であることである。幼児期の終わりまでに育ってほしい姿は5歳児の後半の年齢を意識されていることから適切であると考えられる。もう1点は、今回の改訂の方向性でも示された「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」の“どのように”という面が、活動が進んでいく中で経過的に分かりやすい活動であることである。この活動においては、

子どもたち自身が一から考えていく過程があり、また仲間とともに試行錯誤する場が存在する。ごっこあそびであるという幼児期の特徴的な遊び形態でもあり、そこに個々の関わりや集団での取り組みなど様々な学びを見出すことができると考えられる。時系列で展開が見えやすい活動だという点も含めて妥当性があると考えられる。

また子どもの姿がどうであるかと同時に、保育者が“どのように”という視点をもちながら保育展開しているのかということも重要な視点であると捉えているので、具体的実践例を時系列に追うこと、またそれを実践者としての視点で捉えて考察することに留意したい。そのためには、保育者の意図が分かるものを研究の対象とする必要がある。そこで分析の検討方法としては、各クラス担任が記述した週案日誌（図1参照）からの読み取りを行うこととする。週案日誌には、保育者の予想する保育計画が記されていることと、その実践が日誌として如実に表れるものであること、つまり保育課程と保育指導が語られ、そして、保育者の思いと相まって可視化されたものであると考えられる。さらに、実践者の視点からの考察を深めるため、筆者が保育実践に深く関わりのある園を対象園にしている点も意識している。

動物園ごっこの考察に関しては、まずは時系列に3区分に分けて行う。具体的には、導入期および展開期として動物園ごっこまでの実践(10月4週目～11月4週目)、動物園ごっこ当日の実践(11月24日)と、動物園ごっこ後の実践(11月4週目～11月5週目)である。その区分において、週案からの視点、日誌からの視点、に分けて整理し考察する。

倫理的配慮として、本研究で扱う週案や日誌については研究目的としてでしか扱わない旨、当該園の園長および教務主事から承諾を得ている。また園児の名前に関し

園児		年 月 日		記入者	
お	ら	い	幼稚園	主幹	
				主幹	主事
幼児の姿		保育の重点領域への取り組み(あそび)		教師の援助	
21日(月)		22日(火)		23日(水)	
24日(木)		25日(金)			
週		勤労感謝の日 祝日			
日		誌			
特記事項					

図1 G幼稚園における週案日誌

ではイニシャル表記にすること、使用する写真画像については人物特定ができないものを使用する、またクラス名は特定ができないように実際のクラス名とは異なる表記に変更するなどの配慮を行っている。

3、研究対象園

本研究で対象となる G 幼稚園は、筆者が実践者としての勤務経験がある園であり、現在も理事を務める園である。1937 年（昭和 12 年）設立の私立幼稚園であり、また 2015 年より敷地内園舎に付属保育園を開設している。職員は園長 1 人、副園長 1 人、教務主事 1 人、1 歳児 1 人、2 歳児 2 人、満 3 歳児 3 人、3 歳児 12 人、4 歳児 3 人、5 歳児 4 人、施設長 1 人、保育園フリー 5 人、未就園児クラス 2 人、延長保育 4 人、事務員 3 人、調理員 8 人、管理栄養士 1 人、用務員 4 人、バス運転手 3 人、守衛 1 人であり、園児数は合計 306 人（13 クラス）⁶⁾ で構成される。宗教色は排除し、幼児の人格を認め、一人ひとりの興味や発達の個人差に留意した指導が基本とされており、家庭的な教育環境を大切にし、知育に偏らず年齢相応な心身の‘育ち’を重視している。教育方針としては、まず基本的な生活習慣の自立を目指し、幼児が遊びに集中できる環境を作り、遊びを通して理性の発芽を促し、生きる力を養うことを意識して過ごしている。

4、動物園ごっこについて

本研究で取り扱う G 幼稚園の動物園ごっこについて説明する。ダンボールなどを使って製作した動物に、他学年の子どもたち（主に 3 歳児、4 歳児）を招待し、その作った動物に乗せて動かして遊ぶ機会のことを動物園ごっこと呼んでいる（図 2 参照）。動物園というと、一般的には動物を見る、もしくは観察する、というスタイルで柵や檻を設けて展開されるイメージをもつかもしいないが、G 幼稚園のごっこあそびでは、動物に乗れる、と



図 2 動物園ごっこ当日の様子

いうユニークさがあることは大きな特徴だといえる。動物の製作や当日の進行は 5 歳児が主となる。製作に至るまでには、実際の動物園への社会見学をきっかけにしながら、クラスの枠を超えて動物作りチームを編成し、5～6 人のグループで行う。動物作りチームは、クラスの枠を超えて編成され、普段とは違う保育室であったり、友だちであったり、教師であったりと過ごすことになる。動物作りチームに分かれた子どもたちは、何の動物を作るのか、どのような形にするのか、など設計案を出し合いながら進め、製作を展開する。どのような動物を作っても構わないのだが、人が乗っても壊れない頑丈さを備える必要があるため、ダンボールを組み合わせるだけではなく、箱の中に紙を詰めたり、牛乳パックを敷いたりするなど、強固さを保つ工夫をすることや、飾るものではなく乗り物として扱われるものを作るため、色塗りにおいてもただ絵の具を塗るということではなく、糊やボンドを混ぜて塗るなどの工夫を凝らす。また、動物の形状に近づけるための様々なアイデアや、色塗りを行うなどを、子どもたちが協力しながら行い、おおよそ 10 月下旬～11 月中旬の 4 週間程度の期間で取り組みが展開される。また動物園ごっこが終わってからも、その作った動物を 5 歳児から他学年へプレゼントするなど、異年齢での交流の機会も設けられている。（年長児は 6 月に乗り物ごっこという活動を行っており、その際もダンボールなどを使って乗り物を製作する過程を経験している。ただしその際は、クラス単位で実施している。そうした経験を踏まえて、この動物園ごっこにおいてはクラスの枠を超えての活動を入れている。）

Ⅲ 実践からの考察

1、導入期および展開期の実践

(1) 週案からの視点

2016 年度における G 幼稚園での動物園ごっこは 11 月 24 日（11 月 4 週目）に実施された。それまでの導入期および展開期の過程をまずは週案部分に注目し考察を行う。

各クラスで記された週案の中から「保育の重点」に着目する。動物園ごっこに関して記述されているものは以下の表 1 のように示される。週案は原則、原文のまま抜粋しているが、元の意味から外れない程度に文法表現や表記を変えること、また表記の統一を図るなどの修正を行っている。さらに原文ではクラスを超えて活動することを「解体」「解体クラス」などと表現しているが、本研究においては解釈の都合上、「動物作りチーム」と表記を変更している（以下表も同様に扱う）。

表1 週案における保育の重点(5歳児)

	それぞれのクラスの記述内容
11月1週目	<ul style="list-style-type: none"> ●動物作りがこれから始まるということを伝え、一人ひとりが<u>グループの一員であるという意識</u>をもって行動するよう求めていく。(1組) ●クラスの<u>一員として友だちと力を合わせて活動するよう場面を捉えて求めていく</u>。(2組) ●動物作りに向けて、それぞれの意見やアイデアを出し合いながら、<u>グループの気持ちを一つにして</u>、スタートが切れるように援助していく。(3組)
11月2週目	<ul style="list-style-type: none"> ●やるべき活動が盛りだくさんの毎日であるため、活動と活動の合間の時間を極力短くできるよう<u>気持ちの切り替え</u>を求め、テンポの良い保育を進めていく。(1組) ●クラス以外の友だちと仲良くなり、動物園ごっこに<u>期待感</u>をもつ。(2組) ●動物作りではグループ全員が同じものを作る認識の中で進め、作っていけるように箱取りから始まる工程の<u>一つひとつを教師と確認</u>していく。(3組)
11月3週目	<ul style="list-style-type: none"> ●動物作りだけでなく、どの活動にも<u>その意味</u>をしっかりと伝え理解できるように進めていく。(1組) ●グループの友だちと意思の疎通を図る。他クラスの友だちと仲良くなるよう動物作りだけでなく<u>楽しむ</u>ようにしていく。(2組) ●動物作りチームでの活動が多い中で、<u>一人ひとりが動物園ごっこに向き合う姿</u>を把握し、その姿をはっきり受け止め、更に気持ちを高めていく。(3組)

※表中の下線部は筆者による

それぞれのクラスにおいて多少の表現の違いはあるものの、11月1週目においては動物園ごっこにおける導入過程である様相が読み取ることができる。特に共通して記述されていることは、グループで「力を合わせて」することや「グループの一員であるという意識」「グループの気持ちを一つに」するなどの協同性である。共通の目的、つまり動物園ごっこに向けて動物製作をしていくという目的に向かって、友だちと共に力を合わせていくことが意識されるのは、この活動が個別の活動ではなく、チームで取り組むことであるということや、クラス単位ではなくクラスの枠を超えて動物作りチームという新たな集団で取り組むという中で展開されることから推測できる。おそらくその過程には、上手くいかないことや、意見の衝突、折り合いをつけること、周りの様子を見ながら行動することなど様々なことが予想される。だからこそ、協同性の育みが意識されている保育展開は保育者の意図として表現されるのは当然であるといえる。

11月2週目においては、工程が進んでいくことの意識を「一つひとつを教師と確認」することや、見通しをもった「期待感」という表現、「気持ちの切り替え」を意識した保育展開から、自立心を求めた記述であることが読み取れる。記述の中には、活動が盛りだくさんであることも言及されている。この時期には、動物園ごっこの活動のみならず、勤労感謝の日に関することや、交通安

全に関わることなど、一日に活動が複数重なることも多い。そのため、子どもたちは促されるだけではなく、自分で自分の生活を自覚し、やり遂げていくということが意識されなければならないのである。そこには、受動的な態度ではなく、今何をしなくてはいけないのか、という意識や、今これをするんだ、という自覚などが大きく関わってくる。そうした生活を子ども自身が組み立てていくということは、保育者の指示で動くというものではないということに大きな意味があるといえる。

11月3週目においては、活動の「その意味」を子ども自身がしっかりと理解することとその姿を保育者がしっかりと捉えること、さらに「楽しむ」ようになる視点などが記述され、また動物園ごっこに限らず、ということが意識されている。活動として動物園ごっこを次週に控えているため、それに向けてという意識が生じているが、そこには子どもたち自らが人とつながりを意識し、そこに心地よさや達成されていく感覚の共有などが生じることを期待している保育者の意図も読み取ることができよう。また集団としての育ちを意識する一方で「一人ひとりが動物園ごっこに向き合う姿」にも目を向けていることは重要な視点であろう。

次に、週案における「教師の援助」に着目する。動物園ごっこに関する記述がされているものは以下の表2のように示される。

表 2 週案における教師の援助（5歳児）

	それぞれのクラスの記述内容
10月4週目	<ul style="list-style-type: none"> ●<u>社会見学</u>では安全に過ごせるように、母の協力を得ながら視野を広く見守っていく。次の活動となる「動物園ごっこ」に意欲をもたせ、つなげていけるように気持ちを盛り上げていく。（1組） ●自分で時間の見通しをもったり、時間を作ったりできるように働きかけていく。（2組） ●次の活動となる「動物園ごっこ」に意欲をもたせ、つなげていけるように<u>気持ちを盛り上げていく</u>。（3組）
11月1週目	<ul style="list-style-type: none"> ●グループでしっかり話し合い、<u>イメージを十分に共有できるよう時間をとっていく</u>。また主体的に行動できるよう見守っていく。（1組） ●時間の使い方を考え行動をしていくように働きかける。できていない友だちに対し、気付かせるよう求める。（2組） ●動物作りに向けて、まずは作りたい動物の作り方を<u>グループで一つにまとめ、同じ方向に向かって進めていけるようにしていく</u>。（3組）
11月2週目	<ul style="list-style-type: none"> ●動物作りチームで過ごすことが多くなるため、教師間の連携を密にとり、子どもたち一人ひとりに一層目を向け保育を進めていく。また、保育後には動物作りチームでの子どもの様子を伝えられるように<u>教員同士の意見交換の場をもつ</u>。（1組） ●子どもたちがイメージしたものが形になるように援助していく。ごっこあそびへ繋がるように一緒に考えるようにする。（2組） ●動物作りチームでの様子を他クラスの教師から聞き、<u>担任として気がつかない面を把握、反省しつつ日々の保育につなげるようにする</u>。限られた日程での動物作りになるので、子ども自身がある程度見通しを立てて活動していけるようにする。（3組）
11月3週目	<ul style="list-style-type: none"> ●動物作りチームでの製作であるため、<u>限られた時間を有効に使えるように準備などは前もって行っておく</u>。動物作りチームでの様子は報告会をもち毎回、互いに刺激し合えるようにする。（1組） ●動物作りではグループの友だちと共通のイメージや課題をもって取り組めるように援助したり<u>意欲的に取り組めるように働きかけていく</u>。（2組） ●動物作りチームでの様子を他クラスの教師と共有しながら、認めたり、求めたり、一人ひとりの気持ちを高めていく関わりをしていく。<u>今すべきことを自分たちで考え行動することを求めている</u>。また集中と発散のバランスを考えた計画を立てる。（3組）

※表中の下線部は筆者による

10月4週目に「社会見学」で実際に動物園に行くことが活動としてあるため、その見学を契機に動物園ごっこへの意欲につなげたい保育者の意図が表れている。こうした園外へ行く機会は社会生活との関わりでもある。公共の場所で過ごすこと、園とは違う環境でのマナーなどはこの時期だからこそ学べることも多い。また、動物園ごっこへの「気持ちを盛り上げていく」ためには、直接動物園ごっこの話をすることもあるが、動物の動きや模様、その動きなどに着目するなど、後でその動物がどのようなものであったか思いだせるように特徴を伝えたり、形に注目できるように声をかけたりするなど、保育者が見通しをもって働きかけることが行われている点は、保育がその日のコマ切れで行われている訳ではないことを物語っている。

11月1週目には動物園ごっこに向けて、チームが編成される。作りたいものを決めること、どうやって作ってい

くのか話し合うことなどが活動に含まれてくるため、保育者としてはその中で、主体的に関わっていける援助を意識している。自分ひとりでする個の活動ではなく「グループで一つにまとめ、同じ方向に向かって」いくことは「イメージを十分に共有できるよう時間をとっていく」必要があることにも言及されている。ここでも協同性の育ちが期待され意識されていることが読み取れる。また、相手の立場や友だちの行動について考える機会が生じることを想定している「できていない友だちに対し、気付かせるよう」にする働きかけは道徳性・規範意識の芽生えについても意識されていると読み取ることができる。

11月2週目には、動物の骨格になる部分の製作となる。箱を組み合わせたり、色を塗る準備をしたり、など話し合いだけではなく製作工程がメインとなってくる。もちろんこの週だけに限ったことではないが、「教員同士の意見交換」が意識され「担任として気がつかない面を

把握、反省」することは、活動だけではなく、子どもの様子をしっかりと捉えるチャンスでもあるという認識であることが読み取れる。

11月3週目には、色が塗り終わりいよいよ次週に動物園ごっこを迎えるという雰囲気作りになる。「限られた時間を有効に」ということ子ども自身も意識していく大切さが「今すべきことを自分たちで考え行動すること」という表現からも読み取ることができる。自立心が意識され、生活の主体が子どもである、ということを再確認しようという保育者の意図が表れている。そこには子どもが「意欲的に取り組める」ことが意識されている。

(2) 日誌からの視点

では実践場面ではどうなのであろうか。子どもの様子を含めた実践場面に視点をおくため、この節では「日誌」に着目する。G幼稚園における日誌は、各クラス担任が日毎に記述しているもので、その日の活動の様子や子どもの姿、保育の振り返りなどを織り交ぜながら記述されているものとなる。その日誌において、動物園ごっこに関する記述されているもののみを抜粋しまとめたものを順に示す。10月の4週目に関しては、表3のように示される。

表3 10月4週目の日誌（5歳児）

	それぞれのクラスの記述内容
日誌の記述	<ul style="list-style-type: none"> ■（動物園は）思った以上に他団体が少なく、ゆっくり見ることができた。また動物も見やすいところに出てきていたり面白いことをやってくれたり<u>と充実した社会見学となった。</u>（1組 10月26日） ■（動物園は）いろいろな動物を見て楽しみ、コアラやコンドル、ライオン等の生態を学ぶ機会となった。（2組 10月26日） ■動物園の話をし、動物園ごっこをしてみないか尋ねる。すべての子がやりたいと手を挙げやる気は十分あることがうかがえた。あみだくじでグループを決めることになり行う。子どもたちが選んだ動物はやはり動物園でじっくり見たものや面白いことをしていたものであった。（1組 10月27日） ■動物を決め、どう作るかを話し合う、乗り物ごっこの時より具体的に話し合いがされており、使う材料も決めていた。（2組 10月27日） ■新しいグループ、および動物決めでは<u>手を挙げて発表する場面</u>で普段あまり手が挙がらないDが、何回か発表した。（3組 10月27日） ■動物作りのグループが決まった。EやFは作りたい動物に決まり盛り上がっていた。（3組 10月28日）
週の評価の記述	<ul style="list-style-type: none"> ○動物作りについてグループでの話し合いの様子を見ると、<u>みんなで話し合う</u>という意識が高まっているように思える。引き続き協力して取り組めるように援助していきたい。（2組） ○（誕生日会の）司会や社会見学といった取り組みをクラス全員が出席し経験できた。認める言葉を多くかけることができ、自信につなげることができたと思う。動物園ごっこに向けて気持ちが盛り上がってきているので良いスタートが切れたと思う。（3組）

※表中の下線部は筆者による

10月4週目は、動物園へ社会見学に行ったこと（図3参照）を契機にする動物園ごっこが始まる序章といえる週であったことが分かる。「動物も見やすいところに出てきていたり面白いことをやってくれたり」することが子どもにとっての後の刺激となっていることが「動物園でじっくり見たものや面白いことをしていたもの」を作ろうとする姿につながっていることから分かる。幼児教育が環境を通して行うものであることが正に表れているといえる。自然との関わり・生命尊重と強く関連づいている。子どもにとっては実体験に勝るものはない。図鑑で見る動物、テレビなどメディア媒体で見る動物、もちろ

んそこから学んだり得たりするものはゼロではない。しかし大切なのは、そこに心が動かされる、五感が働く環境があるかということである。少なくとも、この動物園に行った社会見学においては、その影響と考えられる刺激があったことであろう。また、この週では何を作っていくのか話し合いが各クラスで行われている。自分の意見を述べること、また他人の意見を聞くことが「手を挙げて発表する場面」のように展開されている。「みんなで話し合う」時には言葉による伝え合いが積極的に行われる場面であるといえる。特に全員が意見を述べている訳ではないが、普段はあまり発言しないDの様子などが、

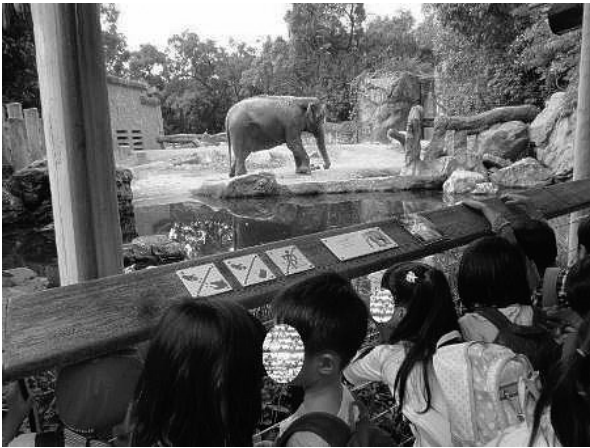


図3 社会見学（動物園）

子ども自身の興味関心に基づくからこそ発揮されていることは大切な視点である。ただし一方で、「EやFは作りたい動物に決まり盛り上がっていた」ことが記されている背景には、思っていた動物とは違う動物作りをすることになった子どもの存在があることを忘れてはいけないのではないかと。満場一致で決まったのかもしれないが、やはりここでは子どもたちの中で折り合いをつけるなどの譲歩があったと考えるべきである。記述はされていないが、こうした集団で一つの物事を決めるという過程においては、道徳性・規範意識の芽生えが存在しており、そして一方で自分の思いを我慢してしまう場面が隠れているかもしれない、といえるだろう。

次に11月1週目を見てみると、以下の表4のように示される。

表4 11月1週目の日誌（5歳児）

	それぞれのクラスの記述内容
日誌の記述	<ul style="list-style-type: none"> ■動物の設計図を考えた。ウサギを作るグループに関しては、リーダーシップをとる子がない感じである。（3組 10月31日） ■顔合わせでは、各グループずつメンバーの紹介と作る動物の特徴などを言ってもらった。チーム名決めでは、なかなか意図している名前が出てこなかった。（1組 11月1日） ■チーム名を決めるという段階であまり意見が出ない。<u>前途多難</u>。（2組 11月1日） ■初めての動物作りチームで過ごす時間では、他クラスに入室するのが初めての子は緊張気味だったように思える。短い時間ではあったが、自分のクラスに帰ってきた時はホッとした表情を見せていた。（3組 11月1日）
週の評価の記述	<ul style="list-style-type: none"> ○教師の話をしっかり聞いて行動に移すということが出来ている子とそうでない子の差が激しい。（1組） ○今週から動物作りが始まった、グループのメンバーとは廊下で会った時など親交を深める場面もある。作るだけでなく、他のことでも刺激がし合える活動をしたい。（2組） ○来週からの動物作りを前に、グループとして一つの目標をもち進めていく<u>難しさと課題を感じている</u>。一つずつクリアできるようにしたい。

※表中の下線部は筆者による

11月1週目は、動物園ごっこで製作を共にするチームが決まり、クラスとは違った環境でのチームでの生活が始まる（図4参照）。初めての環境ということもあり、保育者自身もクラスの子もたちとは違う子を見ることになるので「前途多難」「難しさと課題を感じて」といった表現や「教師の話をしっかり聞いて行動に移すということが出来ている子とそうでない子の差が激しい」などのネガティブな感情が出てくるほどクラス運営とは違った緊張感が感じられる。ある意味では、新しい社会生活を体験しているのである。幼稚園教育要領に示される社会生活との関わりは、家族や地域を主に指しているが、子どもにとってはここでも同様に新しい社会生活を求められている。普段とは違う保育者、保育室、周りの友だ



図4 動物作りチーム顔合わせ

ち、などである。こうした環境の変化に柔軟に応じながら適応していく力は、これから生きていく中で重要な力となっていくはずである。

次に11月2週目を見てみると、以下の表5のように示される。

表5 11月2週目の日誌（5歳児）

	それぞれのクラスの記述内容
日誌の記述	<p>■箱取りを10:00～行う。どのグループもスムーズに決まってく中、コウモリグループはあれやこれやとなかなか思いがまとまらない姿があった。教師から意見を出し、ようやくまとまる。しかし、保育室に戻った後も「いやだ」と主張する子がいたため、グループのメンバーで話し合った。主張する意見を聞いてもらおうと納得できたようで安心する。（1組 11月7日）</p> <p>■動物作りチームで箱取りをする、設計図を見ながら箱を選ぶグループがほとんどだったが、箱がたくさんありすぎて目的のものと違うものを持ってくる子もいた。（2組 11月7日）</p> <p>■動物作りでは、各グループが協力して作っており、<u>保育者が何を言わなくても進めていけるグループ</u>もあった。（1組 11月8日）</p> <p>■ホッキョクグマグループが、少しみんなの気持ちがバラバラでそれぞれが違うことをしている感じである。ラクダグループは4人しかいない日だったが、協力して作っていた。チーターグループは、<u>道具の使い方でめめる場面あり</u>。また何をどうして進めて行けばいいのか分からない子がいるグループには、具体的な指示を出して促した。（3組 11月8日）</p> <p>■グループで何に取り組むか？をリーダーに尋ね、始めた。どのグループも向き合い取り組んでいる。（2組 11月8日）</p> <p>■それぞれのグループが工夫している。教師は、思いを形にする方向性だけアドバイスするのみで、子どもたち自身で作る姿が多くなった。ただ時間が少なく、動物作りのみになってしまう。（2組 11月9日）</p> <p>■動物作りチームでは、それぞれのグループが力を合わせて取り組む姿があった。（3組 11月7日）</p> <p>■動物作りで、ある子が、自分から何かしたいけどできない、と泣き出す場面あり。そのことを教師からグループの子どもたちに伝え、何かできることを一緒に考えるように促した。（3組 11月9日）</p>
週の評価の記述	<p>○今週から動物作りが始まり、やはり大変なメンバーが集まったと改めて理解できる場面が多々あったが、順調に進んでいる。来週からは紙貼り、色塗りがあるので、グループの協力をさらに呼びかけていきたい。（1組）</p> <p>○動物作りチームで過ごすことが多く、体育あそびや昼食。戸外あそびなど様々な刺激を得ることができた週であった。<u>動物作りも回を重ね、チームワークが良くなってきている</u>ことが子どもたちからの話や見ている姿からも理解できた。…さらにチームワークを高め、大きな自信へとつながるよう進めていきたい。（2組）</p> <p>○動物作りにおいて各グループが毎回達成感を感じて過ごしているようで、気持ちが充実しているように感じる。（3組）</p>

※表中の下線部は筆者による

11月2週目は、動物がいよいよ形作られ、製作が進んでいく段階である。子ども同士の関わりの様子においては、より深くさらに対話などが必要不可欠なシーンが多くなる（図5参照）。とは言うものの「なかなか思いがまとまらない姿」「道具の使い方でめめる場面あり。また何をどうして進めて行けばいいのか分からない子が」いる「泣き出す」子がいるなどが見られ、保育者の仲立ちが必要となる場面が多々あることがうかがえる。主張することだけでは物事が決まっていかず、やはりそこには聞く力や折り合いをつけていくことが必要になってくる。話



図5 動物作り（製作）

し合いの難しさ、保育者の介入の度合いなどは「保育者が何を言わなくても進めていけるグループも」存在するため、その時の保育者の状況判断が鍵となっている。協力することと対立することのその双方を行ききしながら過ごす子どもたちをいかに捉えるか。日ごろの子どもの姿をしっかりと観察し分析する目が求められている。またここでは、それぞれが違った方向を向かないようにする方策として「グループで何に取り組むか?をリーダーに尋ね、始め」ることも有用であることが示唆されている。保育の中でこうしたリーダー的役割を引き受けることも子どもにとっては大きな成長を生み出すきっかけとなり、自己統制する力や自己の効力感にもつながる⁷⁾。またこうした役職を与えられる、特にグループを束ねる

リーダーのような存在は、本人にとっても周りにとっても、モチベーションや意欲が向上することにつながることは、教育現場以外でも実証⁸⁾されており、とても有用であるといえる。いろいろな方法は考えられるが、「動物作りも回を重ね、チームワークが良くなってきている」ことを見ると、そうした葛藤や困難さを時間をかけながら乗り越えてこそチームワークや団結といった言葉につながっていくのであろう。また子ども自身が自分たちでやり抜こうとする力が自立心へとつながっていくということがいえるはずである。

次に11月3週目を見てみると、以下の表6のように示される。

表 6 11月3週目の日誌（5歳児）

	それぞれのクラスの記述内容
日誌の記述	<p>■動物作りは10時～12時の約2時間。紙貼りを進めるグループが4つあったこととものが大きいので、完了させるのに時間がかかった。ホッキョクグマグループのHらが口を動かすようにする工夫を考えたことに刺激を受け、ライオングループも真似をした。(1組 11月14日)</p> <p>■今日は2時間あったので、先に絵本を読み、ゲームをした。それぞれが動物作りに向き合い、教師は雑用係に徹していた。(2組 11月14日)</p> <p>■グループによってはなかなか気持ちがまとまらず進まない姿があった。作っている動物の手を動かしたいとか、くちばしを動くようにしたいとか気持ちやアイデアはあるのだが、子どもの力だけでは形として達成できず、どうしても教師が必要以上に手を貸してしまうことになっていた。(3組 11月14日)</p> <p>■今日は登園から降園前まで、動物作りチームで過ごす。ベイ作り、ベイ勝負が盛り上がる。動物作りでは、コウモリグループに付き添い絵の具塗りの様子を見守る。(1組 11月15日)</p> <p>■登園から13:10まで動物作りチームで過ごす。担当がベイ作りに誘い多くの子が興味をもつ。あまりにも盛り上がったので10:00までその遊びを継続した。コウモリは色塗りが完成したので、顔や手足などがどうなっているのか調べて次の活動に何をするのか考えるよう促す。ある子がアイデアを出す、聞きたがらない周りのメンバーがいたので教師が間に入り話し合う場をもつ。(1組 11月17日)</p> <p>■動物作りチームであっても全く不自然さはなく、好きな遊びを楽しむ子どもたち。急の予定を伝えスタート。各グループの進み具合に差があると思っていたが、今日一日で近寄ってきた。ゾウのグループの紙貼りは、Cのチェックもあり、本当にきれいに貼っていて感心する。ウサギはリボンをつけ表情をつけるのに1時間以上費やしていた。明日も動物作りチームで過ごすことを伝えると「やったー！」と返ってきたので負担はないようである。(2組 11月17日)</p> <p>■色塗りはコツコツと頑張る姿があり認め合う姿が見られた。(3組 11月17日)</p> <p>■登園から昼食後まで動物作りチームで過ごす。動物作りは、色塗りの続きが残っていたのはペンギングループだけで、残りは顔や爪など細かい部分を作り上げていた。ライオングループは、毛糸や布を駆使し、凶鑑通りの色合いの再現を試みていた。(1組 11月18日)</p> <p>■午前中の体育あそびが終わってからの動物作り。本当に短いと感じた。クマの手が取れ、改善に時間がかかった。一応、動物は今日でできあがった。(2組 11月18日)</p> <p>■ペンギングループは、ある子がリーダーシップを発揮し、皆が乱れることなくきれいに仕上げていた。ホッキョクグマグループは手分けして行う作業にも気持ちがバラバラな姿が見られた。(3組 11月18日)</p>

週の評価の記述	<p>○動物作りチームで過ごす4日間であった。活動は、どのグループも意見を合わせて取り組んでいた。それぞれの動物に対するこだわりを形にしていくことを援助してきたつもりだが、耐久性に難が生じたように思う。(2組)</p> <p>○子どもたち一人ひとりが意欲をもって取り組む姿があり、来週の本番を楽しみにしているようであった。<u>グループの活動も、日を重ねるごとにチームワークが強くなり、みんなで目標をもち進めている</u>ことを感じる事ができた。(3組)</p>
---------	---

※表中の下線部は筆者による

11月3週目は、動物の形はほとんど完成した状態であり、色を塗っていくなど動物の仕上げに取り掛かる作業が進んでいく(図6参照)。またグループによっては動物園ごっこの当日に向けた準備などを行う週である。動物作りにおいても「口を動かすようにする工夫を考えた」り「ウサギはリボンをつけ表情をつける」などのアイデアを製作に活かしていく姿は、素材の特徴など試行錯誤しながらの過程であったことも想像でき、豊かな感性と表現といえる。しかしながら、子ども任せにしてしまうと「アイデアはあるのだが、子どもの力だけでは形として達成できず」という姿になってしまうという点も保育者の苦悩が見え隠れする。要所において、幼児の発想への認めや関心、発想の実現に向けた材料提示が教師の援助が必要なのである。ここの関わりを丁寧に行うことで、子どもの思考力の芽生えにつながっていく。あれもできるかな、これもこうすると面白いかも、といった発想は、それが実現できる見通しを支えられてこそ生まれてくるものであろう。そしてそこに子ども自身が楽しさを見出し始めると、前週の日誌記述と同様の「グループの活動も、日を重ねるごとにチームワークが強く」なっ



図6 動物作り(色塗り)

ていく姿への変容が表れることになるだろう。日誌の記述からも、対立や困難さを感じながら、徐々に日を追いながら、子どもたち同士の絆が芽生えていっているという様子をうかがい知ることができよう。

次に動物園ごっこの直前までの11月4週目を見てみると、以下の表7のように示される。

表7 11月4週目における動物園ごっこまでの日誌(5歳児)

日誌の記述	それぞれのクラスの記述内容
	<p>■動物作りでは、ライオン以外の4グループが看板作りを終え、ポスターや当日会場になる案内板の矢印を描く。Gは自分ひとりで字を書きたいと言い出し、他のメンバーともめる。周りが仕方なしにGのやりたいことをさせる。子どもたちが、チームであったいろいろなトラブルや不満を担任に報告してくる。後になってぐちぐち言わずに、しっかり話し合っ解決していくよう話した。(1組 11月21日)</p> <p>■動物作りチームでは、看板作り、ポスター描き、役割決めを行った。今日になって、うさぎグループが進まず停滞。ゾウグループとペンギングループのメンバーが、<u>保育室前のポスター描き</u>に取り組んだ。(2組 11月21日)</p> <p>■動物園ごっこの切符作りをした。周りがひもを結んでいるのを見て、どの子も自分のこととして捉えてひもを切り取り組んでいた。誰かにひもの端を持ってもらって切る工程では自然と近くにいる<u>友だち</u>を見つけ声をかけている姿があった。2人組になって協力する姿も見られた。(3組 11月21日)</p> <p>■切符渡しのことばを考える。3つのグループに分かれて台詞を言うという<u>アイデア</u>が子どもたちから出た。(1組 11月22日)</p> <p>■前日の下見会[※]では、保護者から「すごいね」「かわいいね」などと褒められ良い気持ちになっている様子がうかがえた。(2組 11月22日)</p>

■動物作りチームで最後のセッティングと打ち合わせを、力を合わせて取り組んでいた。

(3組 11月22日)

※表中の下線部は筆者による

※「下見会」…11月22日に実施。動物園ごっこの前に、製作した動物を保護者の方が参観できる機会を設けている。保育中に実施するため、どのような過程で取り組んできたのか、動物作りの苦勞など、子どもから直接聞くことができ、保護者が自由に参観できる時間を設けている。

この週に動物園ごっこが実施される。看板や「保育室前のポスター描き」などしながら当日に向けての準備、他学年に動物園ごっこがあることを知らせに行くことや、動物園ごっこで使用する切符を渡しに行くこと等が活動に含まれている。ポスターには字を書いたり、「案内板の矢印を描く」などして場所を示す工夫をしたり、と子どもたちなりに工夫を凝らしながら作成している(図7参照)。数量・図形、文字等への関心・感覚がこういった場面でも見られる。さらにここでは、今までの培ってきた関係性がより強固になっている場面が見られるのが興味深い。「アイデアが子どもたちから」出ることや、「友

だちを見つけ声をかけている姿」が見られるなどは、関係性が築かれてきたからこそ思いが発言できたり、友だち同士のやりとりにスムーズさが見られたりと解釈できる。はじめの頃の緊張感とは違った仲間意識の芽生えが感じられる。

2、動物園ごっこ当日の実践

(1) 週案からの視点

11月24日(11月4週目)に実施された動物園ごっこのその当日の実践について、まずは週案から考察を行う。この日は公開保育を兼ねていた⁹⁾ため、通常とは違い日誌と切り離れた書式(図8参照)による週案を作成している。内容としてはより詳細に記されていることなどを除いては、全くの別書式という訳ではない。多少の違いがあるものではあるが、その中で「週のねらい」「指導上の留意点・環境構成」に着目する。動物園ごっこに関する記述されているものを取り上げて見ていくこととする。抜粋したものは以下の表8のように示される。



図7 ポスターづくり

〇〇年度 11月第4週(11月〇日～11月〇日) 5歳児 〇〇組 記入者 ●●●●				
月 目 標	週のねらい		家庭との連携	
	〇日(月)	〇日(火)	〇日(水)	〇日(金)
幼児の具体的活動				
指導上の留意点・環境構成				

図8 11月4週目の週案

表8 11月4週目の週案における週のねらいと指導上の留意点・環境構成（5歳児）

	それぞれのクラスの記述内容
週のねらい	<ul style="list-style-type: none"> ●グループおよびチームの友だちと力を合わせて、動物園ごっこを盛り上げる。年長児としての自覚をもって年中児と関わる。（1組） ●他のクラスの友だちや先生と一緒に協力して動物園ごっこに取り組む。やり遂げた達成感を味わう。（2組） ●動物園ごっこをグループやみんなと力を合わせてやり遂げ充実感や達成感を感じ、自分に自信をもつ。（3組）
指導上の留意点・環境構成	<ul style="list-style-type: none"> ●動物園ごっこまでの限られた時間を大切に使えるよう子どもたちにも協力する必要性を求め「やればできる」という自信をもって動物園ごっこ当日を楽しみにできるように進めていく。動物園ごっこ当日は一人ひとりの行動に目を向け、動物作りとはまた違った面で力を発揮している姿を捉え、認めを言葉をかけて自信につなげていく。（1組） ●動物園ごっこに向けて、グループの友だちと意見を合わせて作業をしていく。また個々の子どもたちの様子を把握し、頑張っている姿を認め、それぞれが理解し取り組んでいけるように働きかけていく。動物園ごっこ当日は自分の役割を理解しごっこあそびを展開させていけるよう援助していく。また今までの取り組んできたことを認め、達成感や満足感が得られるようチームの子どもやクラスの子どものことを称える。（2組） ●動物園ごっこに向けて、これまでの頑張ってきた姿をしっかりと認め、当日それを出し切れるように気持ちを高めていく。当日は年少・年中児に対して、年長児としてどのように関われば良いのか、一人ひとりの様子を見、場面を捉えて認めを声をかけていく。（3組）

※表中の下線部は筆者による

ねらいとしては「達成感を味わう」「充実感や達成感を」意識した記述になっている。ここまでの頑張りや子どもたち自身が十分に感じてほしい保育者の願いと、それが自信へとつながっていく子どもの姿を見据えてのねらいといえる。指導上の留意点・環境構成の視点からも、「自信をもって動物園ごっこ当日を楽しみにできるように」することや、「頑張ってきた姿をしっかりと認め」「子どもを称える」などの方法で子どもの頑張りや認めたいことが記されている。また、当日の関わりは異年齢での関わりとなるため、年長児として、ということが意識さ

れることは「年少・年中児に対して、年長児としてどのように関われば良いのか」ということを子ども自身が考えながら行動してほしい願いが込められている記述が見られる。年長児にとっては楽しむことも、お世話することもその両方が大切である。本来の互恵的な楽しみ¹⁰⁾が生まれる要素だと考えられる。

(2) 日誌からの視点

前節と同様、ここでは「日誌」に着目する。動物園ごっこ当日に関する日誌については、表9のように示される。

表9 動物園ごっこ当日の日誌（5歳児）

	それぞれのクラスの記述内容
日誌の記述	<ul style="list-style-type: none"> ■どのグループも、年下の子どもたちに優しく接し、トラブルはなかった。ペンギンやホッキョクグマは安定が悪かったが、子どもたちの力で倒れないように防ぐ姿が見られた。公開保育で、外部のお客さんがたくさん居た状態だが普段と変わらない姿の子どもたちだった。（1組） ■とても楽しみに登園してきた子どもたち。その気持ちの高まりが感じられた分、始まるまで間が、少々手持ち無沙汰となってしまっていたように感じた。動物園ごっこでは大人を気にせず、年中児・年少児の子を相手に丁寧に対応し、頑張りながら楽しむ姿があった。例年より短い時間でのごっこあそびだったためか、途中でへばってしまう子はいなかった。（2組） ■動物園ごっこの様子は、どのグループもどの子も、みんな最後の最後まで集中を切らさずに気持ちをもって取り組んでいた、今までになくグループのみんなと協力して進める姿があり、大きなトラブルもなかった。動物作りチームだけでなく、クラスの子どもたちにも今日の頑張りやしっかりと認め、降園した。（3組）

週の評価の記述	<p>○動物園ごっこが行われとても楽しみに張り切る姿が見られた。動物作りチームで過ごすことも違和感なく、どのグループも協力して進めている姿が十分に伝わってきた。当日も、主体的に参加する子どもたちの姿があり、<u>日々の積み上げられた活動の結果</u>ではないかを感じる。この姿をしっかりと受け止めて次につながるようにしていきたい。(1組)</p> <p>○動物園ごっこでは集中力が切れずに取り組めていた。この経験を活かして、今後も他クラスと交流したりするなど、良い刺激となるようつながりを意識し、働きかけたい。(2組)</p> <p>○みんなで目標を達成できたことはきっと充実感もあっただろうし、大きな自信につながったのではないと思う。限られた時間の中で見通しをもって過ごし、子どもたちの中にメリハリのある行動であったり、気持ちの切り替え方であったり、そうした力がついてきたことを感じた。(3組)</p>
---------	--

※表中の下線部は筆者による

子どもたちの頑張りが印象的で、記述にも「頑張りながら楽しむ姿」や「協力して進める姿」として表れている。他学年すべての子どもたちが乗りに来るため、世話をする年長児にとっては、その度に動物を押すという、体力を使い続ける時間となる(図9参照)。そのためには、**健康な心と体**が必要となることは述べるまでもない。今までの過程において、友だちと力を合わせて取り組んできた**協同性**が存分に発揮されている場面でもある。動物を押す子ども、順番に並んでいる年中児や年少児を整理して並ばせる子ども、緊張している子に暖かくフォロー



図9 動物園ごっこ(当日)

をする子ども、それぞれが役割を果たしながらではあるが、それこそ臨機応変に対応していく様子が実際には見られた。また先にも述べたが、この日は公開保育でもあり、外部の方が多く保育室や廊下などに居られる状態でもあり、そういった意味ではいつもと違う雰囲気は漂っていた。子どもたちにもある程度の緊張感が生じていたであろう。ただ、「集中力が切れずに取り組め」たことや「普段と変わらない姿」で過ごせたことは、「日々の積み上げられた活動の結果」といえる。こうした行事での子どもの個々の姿は、日常生活で培ってきたことがどれくらい発揮できるか、そうした今までの土壌の育ちが確認できる。いつも以上に張り切る子もいる。また意外にも、という発揮の仕方をする子もいる。こうした個々の表現の違いにも目を向ける保育の視点が重要である。

(3) 他学年からの視点

動物園ごっこの当日は年中児・年少児も、そこに関わる保育者も参加し、園全体でごっこあそびを楽しむ。ここでは、他学年からの視点ではどのように捉えられるのかということ了他学年の「日誌」から考察していく。まずは3歳児クラスの日誌については、以下の表10のように示される。

表10 動物園ごっこ当日の日誌(3歳児・4歳児)

	それぞれのクラスの記述内容
3歳児	<p>■ Lが意外にもなかなか動物を決めて乗る、ということができず。友だちの力を借りて何とか乗ることができた。他の子も楽しんでいたが、時折不安げな表情を見せる子も。反対に、楽しくなりすぎて<u>終わりが受け入れられずに泣く</u> Mの姿も。(いちご組)</p> <p>■ 「動物園ごっこ楽しみだね」という声はそれほどなかったが、朝の牛乳を飲むのが早かったり、片づけをいつも以上に張り切ったりする姿から、楽しみにしていることが感じられた。始まる前から緊張している子どももいた。が、<u>ほとんどの子が動物に乗ることを楽しんだ</u>。しかし Nは誘いかけても拒否。担任と一緒に、ということや、他の友だちと一緒に、という誘いには応じなかったが、「先生が乗るところを見ていて」という言葉には応える姿があり、Nにとっては順番に並んでその様子を体感するだけでも大きな一歩だったのでは、と思う。(りんご組)</p>

	<p>■はじめこそ戸惑う姿が見られた子どもたちだが、動物に一つ乗ると次々と意欲がわく姿が。お店屋さんごっこの経験[*]もあり、遊びに入りやすかった。<u>仲良しの子どもたち同士が手を取り合って歩く姿は嬉しかった。</u>帰ってきてからも「いっぱい乗った！」と興奮気味。(ぶどう組)</p> <p>■動物園ごっこを楽しみにしていたようで、朝からわくわくしている様子が見られた。Jは今までの姿から緊張して固まってしまうことを予想していたが、最初の一步は躊躇したがその後とても良い表情で動物に乗る姿が見られた。Kは<u>たくさんの人の中でドキドキした</u>ようで、最初は「乗らない」と言う。友だちとつながるよう声をかけたり、教師と一緒に行動することで楽しくなってきたのか、最後の10分間は自分の好きな動物のところへ自ら乗る姿が見られた。クラスの中で動物に全く乗れなかった子はおらず、どの子も楽しそうな表情で乗っていた。たくさんの人の中で固まっていた子もいたのだが、年長児が誘いかけて対応してくれた。(ばなな組)</p>
<p>4歳児</p>	<p>■最初こそ全体的に引き気味の様子だったが、段々と友だちといろいろな動物に乗るなど、回れるようになっていった。Oはずっと不安そうにしていたが、途中から慣れて自分の乗りたいものに行き、<u>たくさん乗れたことを喜ぶ姿</u>に変わっていった。(あか組)</p> <p>■朝から動物園ごっこを楽しみにしている子どもたち。Pは目当てのお兄ちゃんがいるところの動物に乗る、と意気込んでいたが、2階まで来ると表情が固まった。順番には並ぶが、いざ自分の番が来るとまた表情がこわばる。乗りたいけど、乗れないというもどかしさを感じているようであった。ただ終わった後に「1回乗った！」ということを楽しそうに話す姿を見ると、見るだけでも参加したことになっているというPの気持ちが分かった。(しろ組)</p> <p>■乗り物ごっこ[*]の時よりは<u>3クラスをどんどんまわる姿</u>が全体的に多かったように思う。<u>年長児に対してお礼を言う姿</u>が少なかった。雑然とした雰囲気の中で難しかったかもしれないが、自然に出るように日ごろの保育を意識していきたい。(き組)</p>

※表中の下線部は筆者による

※「お店屋さんごっこ」…年中児が何種類かのお店屋さんを作り、手作りの品を並べ、そこに年少児をお客さんとして招待するごっこあそびを指す。ちょうどこの動物園ごっこの前週に催され、テラスに商店街ができる様相を子どもたちは経験している。年長児は参加しないが、年中児と年少児が参加している。

※「乗り物ごっこ」…年長児が年中児を招待して6月に展開したごっこあそび。詳細についてはII章参照。

3歳児では、まず日誌の特徴として個人名の記載が多いことも読み取れる。個別の姿がそれぞれ違い、個人差が際立つ年齢という特徴が見られる。またそれに応じようとしている保育者の意識の表れともいえる。そうした個人差が顕著な学年であるからこそ、「仲良しの子どもたち同士が手を取り合って」過ごす情景があったり「ほとんどの子が動物に乗ることを楽しんだ」りする一方で、「たくさんの人の中でドキドキ」する姿や、「終わりが受け入れられずに泣く」姿が見られるのであろう。このような子どもの姿を捉え、関わりを続けていくことが、今後の子どもの育ちの土壌になる。また注目できるのは、「年長児が誘いかけて対応」している場面である。この動物園ごっこの一つの特徴に全学年で展開するいわば異年齢の関わりがあるという点が挙げられる。実はこうした異年齢の関わりが、**道徳性・規範意識の芽生え**に大きく関わっていると捉えられないだろうか。子ども同士の思いの主張やぶつかり合いで折り合いをつけることもそうであるが、ちょっと上のお兄ちゃんやお姉ちゃんから学ぶ、という場面は、この動物園ごっこだけでなくもみ

られる。注釈に記したお店屋さんごっこでも同様であろう。そこには年下を気遣う思いやりがあり、そこに安心や親しみを抱く憧れがあり、そうしたことが子どもたちの中に染み渡っていく。異年齢だからこそ芽生える感情というものの可能性を考えられるだろう。

次に、4歳児クラスの日誌について見てみると3歳児と比べて「たくさん乗れたことを喜ぶ姿」や「3クラスをどんどんまわる姿」など、全体的に余裕をもって楽しみながら参加している子どもが多いことがうかがえる。6月に乗り物ごっこを経験していることも影響していると考えられるだろう。また、3歳児と同じようにいつもと違う雰囲気に飲まれてしまう子どもの姿もあり、4歳児においても個人差に留意する必要性が感じられる。「年長児に対してお礼を言う姿が少なかった」ことは、残念である保育者の心境が語られている。せつかくの異年齢での関わりをしていることにおいて、年長児から年中児に優しくするという一方性でなく、やはり年中児から年長児に対する感謝やありがとうの気持ちを伝えることなどは、子ども自身が積極的に行ってほしいと期待して

いるが、まだまだという状況である。異年齢保育の互恵性を考えた時に出てくる課題といえる。しかしながら、こうした反省や実際の子どもの姿を受けて、日々の保育に還元していくことが大切なのであることに気付かされる。挨拶はコミュニケーションのスタートとされる¹¹⁾。挨拶という生活において基本的なやりとりを、このような特別な日だから、ということではなく、日常的に交わせるようになる土壌を育てていくことも言葉による伝え合いを助長する働きかけの一つになり得るのである。

3、動物園ごっこ後の実践

動物園ごっこが終わり、それで活動が全く区切られてしまう訳ではない。その後においてもその余韻というべ

き楽しみ方が存在する。その最たる活動が、動物園ごっこ当日で使った動物を他学年にプレゼントする、ということである。もちろん、動物園ごっこでたくさん子どもたちを乗せ、動かし、引っ張り、回し、と激しい動きに耐えてきた製作物である。そのままでは無惨な格好であることは否めない。形が変形してしまっている箇所や、破れてしまった箇所、色が褪せてしまった箇所などが多くある。そういった部分の補強や修正が必要なため、修理を行うことが動物園ごっこの終わった後の活動に含まれてくる。修理をし、ある程度補強が完了すれば、その後各クラスにプレゼントされる、という流れである。その後の日誌において、動物園ごっこ後の様子は以下の表11のように示される。

表11 動物園ごっこ後の日誌（5歳児）

	それぞれのクラスの記述内容
日誌の記述	<p>■早速、年中組と年少組のクラスの子どもたちから動物の修理依頼が入り、慌てて出勤する。ライオンの修理は最初、牙の修理だけだったが、口が動かないことが分かりひもを通すのに時間がかかった様子。しかし諦めずに最後までする子どもたちの姿があった。（1組 11月29日）</p> <p>■動物で遊んでも良いことを伝えても、<u>プレゼントするもの、という思いが強いのか、全く動物では遊ばない子どもたちであった。</u>（2組 11月28日）</p> <p>■動物をプレゼントする際のメッセージ作りは、各グループで話し合いながら進めていた。気持ちとメッセージがつながるように求めている。（3組 11月28日）</p>

※表中の下線部は筆者による

5歳児の子どもたちは動物を修理し、それをプレゼントするという見通しをよく分かっており「プレゼントするもの、という思いが強いのか、全く動物では遊ばない」姿が象徴的である。決して、動物で遊ばないことはマイナスのことではなく、その遊びが年中児や年少児で広げられることをしっかりと理解しているからこそその姿ともいえるだろう（図10参照）。ともすると子どもの遊びの展開は、その子ども自身が遊びを楽しむ視点にのみ意識

がいきがちであるが、人の役に立つ喜びを感じる視点も遊びの中には存在するだろう。集団の中で自然と役割を受けもち、それを果たす楽しさを十分に経験する必要は、決して役務や強制では芽生えない¹²⁾。**道徳性・規範意識の芽生え**は、自分の存在は人から必要とされている、ということが根底にあってこそといえよう。

4、動物園ごっこと10の姿を照らし合わせた整理

本研究においては、2つの視点から10の姿を見ようと試みている。一つは週案からという視点である。これは保育者が立案しているカリキュラムであり、いわば課程論である。もう一つの視点は日誌である。これは実際の子どもたちの姿を含めた実践であり、そこで行われているのは保育指導論であるといえる。その両方の視点からここまで述べてきた分析を元に、10の姿を再度整理すると以下のようなイメージ図が示される（図11、別添資料）。これは文部科学省資料のアクティブ・ラーニングの三つの視点を踏まえた、幼児教育における学びの過程「ポップコーンパーティーをしよう」を参考にアレンジしたものである。三つの視点を10の姿に置き換え、さらに週案からの視点と日誌からの視点の双方から浮き出して



図10 作った動物のプレゼント

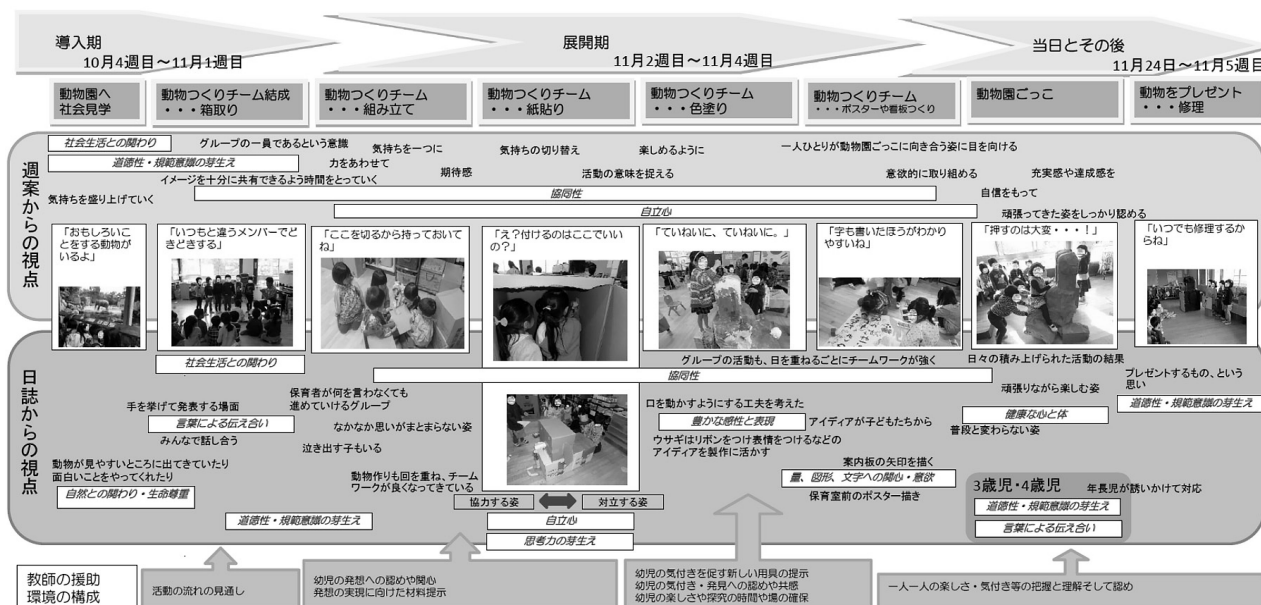


図 11 動物園ごっこ10の姿の整理

いると想定したイメージ図として、本研究で示すことのできるモデルである、と解釈できよう。また図式化されていないがこの背景には、当然5領域があり、またここから子どもたちに焦点化すると、主体的・対話的で深い学びが浮かび上がってくるはずである。

「健康な心と体」

今回の動物園ごっこを考察していく中で「導入・製作期」ではあまり触れられなかった項目でもあった。当日は体を使って動物を動かすことなどが含まれていたため、この姿を見据えて解釈することはできるがやはりその記述は週案においても日誌においても少ない傾向が見られた。その理由に、生活の中での充実感や満足感といったものが、週案や日誌ではあえて記述されることなく、ごく日常的として、言い換えれば当たり前のこととして生活を送っている証拠でもある。とは言うものの、やはり保育実践において当たり前だからと切り捨てて良いものではない。子ども自身が、何のためにするのか考えることや、何が必要なのか考えて行動することを、保育者が意識的に取り組み見直す視点は失ってはいけないはずである。また、本研究では“動物園ごっこ”という製作に関わる活動に焦点を当てているが、これが例えば運動会のダンスであったり、かけっこであったり運動面に関わる活動に焦点を当てれば、当然この項目が意識される要素は高くなることが予想される。

「自立心」

非認知能力に関わる力という観点でいっても、今回取り上げた活動の中でも十分に意識されて取り組まれていた項目であった。導入期、展開期、その後との時期においても、達成感や満足感などが自信へとつながっていくと捉えられる場面が随所に見られた。週案においても日誌においても多く見られた項目でもある。ただこの力は5歳児で完成ではなく、もちろん学童期においても伸びゆく力でもある。そのため、幼児期ではこの力が十分でないといえられるような育ちのばらつきが見られるのも幼児期の実践における特徴でもある。

「協同性」

子ども同士が力を合わせて取り組む活動という特徴があるため、動物園ごっこを通じてどの時期においても強調して意識されていた項目であった。また週案にも日誌にも意識されていた記述が多くみられたことも特徴である。子どもの育ちの面から見ると達成しているかどうかには課題はみられたが、保育者が意識しながら取り組むという点においては、特に週案の中で最も意識されていたことである。協同性に関しては、5歳児から急に芽生えてくるものではなく、もっと以前からの集団を見る目や感覚が重要であると捉えられることを考えると、この動物園ごっこのように異年齢での関わりにおいて、協力している姿を見ることがや触れることこそ、その芽生えにあたることも示唆しているといえよう。

「道徳性・規範意識の芽生え」

集団で取り組むという活動においては、重要となる項目であり、動物園ごっこにおいても十分に意識された項目であった。特に導入期や動物園ごっこ後の取り組みでは、他学年も含め、子どもたちの姿から捉えられていたことも読み取れた。道徳性につながっていく互いに思いを主張することは、製作過程でも、ごっこあそび当日でも盛んに行われていたことは日誌記述にも表れていた。しかしながら、そこを支えていく保育者の視点も重要であることも再確認できた発見も大きいといえよう。

「社会生活との関わり」

直接的に、園外の公共機関と関わっているのは、社会見学の際に動物園を訪れるという1日だけではあるが、園内の活動を見てみても、そこには社会生活が含まれていると考えられた。つまりクラスにおける学級組織そのものが社会でもあると捉えられる見方である。動物園ごっこでは、そうした居心地の良いクラスという集団を飛び越えて活動を行っている。また参加する他の学年の子どもたちにとっても、いつもとは違う環境の中で過ごす。小さな幼稚園というコミュニティにおける社会ではあるが、大きな意味での社会生活につながっていることは間違いない。こうした社会との関わり、その生活に触れることは動物園ごっこにおけるクラスの枠を超えた活動においてもみられ、十分に伸びゆく力の基礎となっていることがうかがえる。

「思考力の芽生え」

考えるという過程が大切にされているかどうか、それはこの思考力の芽生えが大きく関わっているといえる。ただ週案にはそれに強く関わる記載は目立たず、日誌の記述からの考察において、製作過程における工夫などを捉える視点がそれにあたると解釈できた。ただ少なくとも、この動物園ごっこの製作そのものが、完成された設計マニュアルがある訳ではなく子どもたち自身が考え出したオリジナルである。動物の耳の長さはどうするのか、体の大きさはどれ位がいいか、体の色合いはどう配色するか、人をどこに乗せるのか（もしくは入れるようにするのか）など、想像力を働かせ、また工夫しながら作っていく過程がある。この過程段階こそが、思考力である。もちろん、保育者の助言やアドバイ스가あって初めて成り立つものでもあり、その苦勞や苦心は日誌から読み取ることができたが、子どもが知恵と力を出し切った一歩先を保育者が見据えること、そしてそこに未来への思いを拓くちょっとした援助をすることが必要ということである。

「自然との関わり・生命尊重」

身近な動植物に関わる事象については、動物園ごっこの活動の中では直接的には扱われにくい項目であった。社会見学で動物を見るときといった直接体験は土台になっていると考察できたが、それ以外の場面においては週案においても日誌においても項目として意識されにくい項目だったと捉えられる。

「数量・図形、文字等への関心・感覚」

立体的に造形していくというこの動物を作る過程においては、否が応にも図形を意識する過程があったといえる。設計の段階から子どもたちの間で十分に意識されていたことである。箱取りの段階で、どのような形の箱を選ぶのかということは、立体的に完成形をイメージしながら選別する必要がある。動物の形を、ダンボール箱に置き換えてという思考は、いわば立体の展開図を考える過程に相当する。胴体をどう表現し、足の部分をどう表現し、と考えることは、様々な図形に触れる体験であることは間違いない。当日のポスターや看板では、文字との出会いもみられた。もちろん書ける子もいれば、そうでない子もいる。決して保育の中で書く指導はしていないが、子どもにとっては自然と生活の中で関わって親しんできたものをただ純粹に取れいれようとしている姿なのである。子どもたちは文字を書くことだけに囚われず、それは記号であったり、標識であったり、絵であったり、表現は様々なのが興味深いといえよう。

「言葉による伝え合い」

話し合いが中心的に行われている活動においては、この項目についても重要度が高く扱われたといえる。特に初期の出会いの場面、話し合いの場面においてはその活動の主軸となるのが言葉でのコミュニケーションである。また異年齢で関わる場面においてもその重要性を確認することができた。

「豊かな感性と表現」

動物作りにおける設計図は、教師がこのような作りなさいと示したものではない。そこには子どもたち自身が、このように作りたいというイメージ、こんな風してみたいというアイデアや発想などが尊重され進められている。その意欲を受け止めながら展開される過程においては、表現が尊重されることへの喜びや楽しみが介在している。そうした表現することへの支えがあって、伸びやかに育っていくのが感性と呼べるのであろう。

この10の姿は、5領域を捉えて行った保育が、5歳児

後半にあたり「じわー」とにじみ出てくるようなイメージと例えられる¹³⁾。いわばあぶり出しである。ただしあぶり出して出てきたものには濃淡がある。整理してみるとやはりその濃淡が見えてくる。その濃淡は、保育者がイメージするものと、実際の子どもの姿においても同様にみられることが、本研究の週案と日誌の分析からも見えてきた。それ以外にも、園によって、もしくは活動によって、または学年によって、その意識が薄い部分、もしくは意識されていない面などがあぶり出されるかもしれない。今回取り上げた動物園ごっここの実践においても、その濃淡がみられたことから予想できよう。ただしその濃淡の淡い部分が直接的に課題となる、とは考えられないのではないのか。淡くても濃くてもその活動の意味を考えていく。つまりは濃淡を無くすことが重要なことではないと考える。例えば動物園ごっこでは「自然との関わり・生命尊重」については、週案の記述からも日誌の記述からも淡かった項目であると捉えられる。むしろその濃淡があることは認めていくこと、つまり活動によっては例えば「自立心」がクローズアップされたり、重要視されたりする活動が存在するはずである。それを認める視点こそが大切にされなければならない。園の行事で例えると、誕生日会では、運動会では、発表会では、遠足では、と様々な活動や行事があり、その保育展開においては子どもの育ちに期待する姿が、その重点的に扱う見方は変化するものであろう。教育要領で示されたものが、現在の保育実践を縛るものとしてあるのではなく、従来の保育を否定せずに、それでいて学校教育であることを真摯に捉える視点が求められている。こうした10の姿を日々目標に定めながら保育が展開される訳でもなく、そこは様々な環境を通して行う教育が多様にあることが基礎にあることを忘れてはいけないと考える。10の姿は、決して後付でもなく、小学校へ行くまでにつけておかなければならないといった努力して身につける目標な訳でもない。この研究を通していえることは、今まで2年ないし3年間行ってきた保育がしっかりと子どもの育ちと結びついて実践されているかどうかを見直す指標にはなり得るという考え方が、モデルを提案することで示唆されたのではないのか。また活動から意味づける際に、教育要領に示された10の姿はそれぞれの項目が決して並列で語られる必要はない、ということも見えてきた。幼小連携ということが論点として挙がるにしても、カリキュラムの作成や交流活動に終始するのではなく、こういった学びの視点を実践者が見極めることにより、幼児教育に誇りをもち進めていける手立てになり得る。そして、その視点をもつことが、実践者としてこれからの幼児教育の担い手としての自覚につながり、そうした力が必要な時

代に入っているといえよう。

改めてこの10の姿を達成目標にすることが求められているのではない。あくまでも、幼児期の調和の取れた発達を目指していこうということが前提にある。では、その方向性ともいえる姿が改めて教育要領として国のナショナルカリキュラムとして示されたことと、実際の保育実践とどう結びつけていくのか。これが今、幼児教育の実践現場に突きつけられたともいえる。さらに今回の考察においては、あぶり出すために10の姿を一つずつ扱って用いたが、子どもの姿として見る時には、10の姿を個別に一つひとつ抜き出し評価していくことはナンセンスともいえることは十分に配慮したいことである点も付記しておく。

IV おわりに

今まで幼児期の終わりまでに育ってほしい姿と保育実践を関連づけて述べてきた。保育実践の取り扱いでは、日誌や週案からの抽出ではあえて、保育者が日常の保育で感じている言葉そのものを拾う意味でも、原文のまま扱うようにした。もしかしたら、子どもの育ちから離れているような感覚的なことや感情などが入り混じっており研究素材としては適切でないものを含んでいるかもしれない。しかしながら、実際の実践とはそのようなものであると考えている。決して崇高できれいな実践例だけではなく、時には感情に揺り動かされながら保育は展開される。本論では取り扱わなかったが、子どものことがマイナス面も含めて詳細に書かれている日誌の記述は意外にも多いことがよく分かった。取り扱わなかったが、しかしながらそこにこそ焦点が当てられるべきなのかもしれない。保育者が子どものありのままの姿を見て感じたことは、成長面や育ってほしい面が見られる一方で、そうでない一面やそこには程遠い姿などを捉えた視点は、保育する上では最も語られるべきことなのかもしれない。実際の保育の反省会や事例検討会などでは、そうした子どもの課題を中心的に扱う在り方が主であるような実態もあるだろう。明日の保育を見つめる時に、やはり直近の課題を解決に導きたい保育者の性があるのかもしれない、また保育指導という決してマニュアル化されていない不確実性がそうさせているのかもしれない点も否定できない。

しかしながら見方を変えてみると、やはりそれだけではないことも意識する必要がある。例えば記述することに関しての保育者のスキルである。その記述が本当に子どもの育ちに関わって深化した記述になり得ているか、という視点に立てば保育者の研鑽が必要な面も十分に考

えられる。日誌の書き方や記録のとり方を含め、保育の質の向上に寄与するものであるかどうかの各々の検証が必要である。現実的には保育業務の忙しさのため難しい現状があるだろうが、そういった検証や研修などに光を射す意味でも、瀧川¹⁴⁾の写真を用いて行う園内研修の方法についての提案、また秋田¹⁵⁾も著書の中で述べているPEMQ (Photo Evaluation Method of Quality) の可能性などには注目したい。そうした研鑽と見直しを図りながら、実践を見つめていくことを繰り返す作業が必要なのだろう。

本研究では、幼稚園が研究のために特別に行ったことではなく、あくまでも日常の保育を見直す視点と、改訂された幼稚園教育要領から見るという照らし合わせを行った。課題として上記のように保育者の記述からではその読み取り方に個人差が生じている点が挙げられる。インタビューやビデオ記録などを頼りにする方法の検証は加えるなど工夫することは有用であろう。またある特定園での検証に留まっていることもおそらく、考察としてのより深められる可能性は残している。他の園での事例などとの比較なども今後考えていく。

課題を挙げれば暇ないが、どこの幼稚園であっても、行事と呼ばれる活動や、5歳児の後半に取り組みような活動があると思われる。各幼稚園において、その活動の意味を問い直したり、新たに視点を見出したりするなど行うことに示唆を与える契機になればと考える。それぞれの実践者が、今までの歴史や保育を肯定しながら、次の世代を見据える大きな視点をもつことに大きな意味があると考えているのである。

注

- 1) 文部科学省中央教育審議会 (2016). 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申)
- 2) 文部科学省 (2017). 幼稚園教育要領<平成 29 年告示>. フレーベル館
- 3) 文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会幼児教育部会 (2016). 幼児教育部会における審議の取りまとめについて (報告)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/057/sonota/1377007.htm (2017.8.31)
- 4) 改訂に携わっている委員の一人でもあり、教育課程部会幼児教育部会の主査を勤めた無藤隆は自身の facebook 上に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿と5つの領域の内容との関係を説明する」と題し、2017年1月、幼稚園教育要領が告示される前に説明されている。
- 5) 兵庫県私立幼稚園協会主催の幼稚園教員養成校と私立幼稚園との懇談会 (2017年5月29日開催) における文部科学省による行政説明「新幼稚園教育要領の方向性・将来の展

望などについて」の中で、今回の改訂はこども園・幼稚園・保育所の整合性、さらには小学校以降の学習指導要領との接続を図ることを意識したことを強調し、ただ従来の幼児教育の方向から大きく方向転換した大改訂ではない、ということが語られた。

- 6) 2016年11月24日実施の(一社)大阪府私立幼稚園連盟三島支部公開保育における配付資料より。
- 7) 秋田喜代美 (2014). 保育の温もり～続保育の心もち～. ひかりのくに, pp.122～123
- 8) 小松成美 (2017). 虹色のチョーク 働く幸せを実現した町工場の奇跡. 幻冬舎, pp.142～146
- 9) 大阪府私立幼稚園連盟の公開保育実施園として、当日は、60名程度の幼児教育関係者が来園。なおこの日は午後に分科会と講演会を計画したため、午前中のみ保育となっている。
- 10) 秋田喜代美 (2011). 保育のみらい. ひかりのくに, pp.34～35
- 11) 平山許江 (2015). 幼児の「ことば」の力を育てる. 世界文化社, pp.150～151
- 12) 岸井勇雄・横山文樹著 (2011). あたらしい幼児教育課程総論. 同文書院, pp.115～116
- 13) 大阪府幼児教育推進フォーラム第2回「今求められる就学前の教育・保育とは～新しい幼稚園教育要領等のめざす方向～」における (2017年6月28日開催) 鼎談の中で、山下文一は、眠っている子どもたちの“やればできる”という姿が活動によって浮かびだすイメージと語っている。
- 14) 瀧川光治 (2015). 写真を活用した保育の振り返りと園内研修の手法と提案. 大阪総合保育大学紀要第10号, pp.287～297
- 15) 前掲、秋田喜代美 (2014). 保育の温もり～続保育の心もち～. ひかりのくに, pp.20～21

引用・参考文献

- 古賀松香 (2016). 自ら学ぶ楽しさをつなげる～小学校と一貫性のある教育課程編成を目指して～. 京都市子育て支援総合センター, 第4回協働機構研修会記録
- 利根川彰博 (2015). 協同的な活動としての「劇づくり」における対話. 保育学研究第54号第2号, pp.49～60
- 仲本留美子 (2014). 幼児が主体的に活動し創造性を豊かにするための環境構成と援助の工夫～なりきって遊ぶ「ごっこ遊び」を通して～. 南部広域行政組合島尻教育研究所, 第39期調査研究
- 山口葉月, 中尾典子, 吉村美保, 川口央, 岩坂ゆかり, 井口均 (2013). 幼児期にふさわしい体験や活動とは何かを考える～異年齢交流の中で遊び込める環境づくりの工夫を通して～. 長崎大学教育実践総合センター紀要12, pp.327～342
- 山田千明, 清水亜紀, 相原佑美 (2012). 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続: 教科活動につながる協同的な遊びと学びについて考える. 山梨県立大学人間福祉学部紀要 Vol.7, pp.59～68
- 山田恵子, 渡辺麻美 (2012). 幼児期の発達に即した保育のあり方を探る～ごっこ遊びに見る子どもの育ち、教師の援助は～. 第3回幼児教育実践学会口頭発表資料

About the Meaning of “Development Before Going to Elementary School”, and Early-Child Education Practice : Case Study of a “Pretend Zoo Play”

Daisuke Tojo

Osaka University of Comprehensive Children Education

Based on the Course of study for Kindergarten (Ministry of Education, Science and Culture of 2017) which was newly arranged and shown in 10 items as this “development before going to primary school”, this research is aimed at improving early-child education practice at the kindergarten (The target is “Pretend Zoo Play” including exchange activities at different ages). As a method, this research attempted to consider from the weekly program and diary written by kindergarten teachers. As a result, it was shown that arranging with a viewpoint on activities is an index for reviewing childcare in kindergartens. Also, it became clear that it is important to acknowledge that both positive and negative surfaces exist by activity.

Key words : “Course of study for Kindergarten”, “Pretend Zoo Play”, weekly program, diary, review of the early-child education practice